

甲骨占卜の改竄・附会

落合淳思

はじめに

甲骨文とは、周知のように亀甲や牛骨を用いた占い、すなわち甲骨占卜の内容である。甲骨占卜は、甲骨に熱を加え、それによって生じたひび割れの形によって、狩猟や祭祀の可否、あるいは降雨・災害・収穫の有無など、多様な事柄について将来を判断するものである。

本稿は甲骨占卜に関する論述であるが、ひとつはつきりさせておきたいことがある。それは、占いは科学的根拠がないということである。もし、科学的根拠に基づいた将来の判断であれば、それは占いではなく予測あるいは予報と呼ばれるべきである。

ところで、科学的根拠がなくとも「当たる占い」がある。身近な例であるが、朝のテレビの占いで「今日は無駄遣いに注意」とあった場合、その日に無駄遣いしたら「占いが当たった」ということになり、無駄遣いをしなかったら「占いがあつたので無駄遣いせずに済んだ」という解釈が可能である。こうしたものは、占いというよりは、一種の訓示と見るべきであろう。

甲骨占卜の内容は、そうした訓示的なものではなく、「雨が降るか」「次に災いがないか」といった、当たりかはずれかが明確にされるものである。しかも、甲骨のひび割れという単純なものから多様な内容を占うのであるから、科学的根拠はないと考えてよいだろう。しかし、それに

も関わらず、甲骨文中の占いの吉凶判断の部分（繇辞）では、狩猟や祭祀など、人間が能動的に行うものについては「吉」や「大吉」が多く、否定するものはほとんどない。また、占いの正否を述べた部分（驗辞）では、降雨や出産の日付など人為的に決定できないものであっても、ほとんどが占いが当たったと記述されている。

従来は、この問題について占卜の技術的側面から分析が行われていた。甲骨占卜は龍山文化期に普及したが、当時は甲骨を加工せずに占卜を行っていた。その後、二里頭文化期・二里岡文化期に甲骨を薄く削った、背面に鑽鑿と呼ばれる窪みを穿つたりする加工が行われるようになった。甲骨文の刻辞が行われた殷墟文化期（殷代後期）には、加工がさらに精密になった。このことから、甲骨占卜に吉が多いことは、甲骨の加工によりひび割れの形状を操作していたという推測が成り立つ。

甲骨占卜の工程に関して論じた拙稿「殷代甲骨占卜工程の復元^①」では、実際に牛の肩甲骨を入手して占卜工程を復元し、骨の厚みや鑽鑿の深さや形により、ひび割れの形を意図的に変えることができることを証明した。

具体的には、骨は四ミリメートルほどの厚さにすると、熱を加えることによりひび割れが発生しやすくなるが、横方向のひび割れになる確率が高い。そこで、縦方向の細長い窪み（鑿」という）を穿つことにより、縦画と横画からなる「卜」字形のひび割れを人為的に形成していたので

ある。つまり、甲骨の加工は、甲骨上に出現するひび割れの形をコントロールするためのものであり、占卜を行うものに都合のよい結果が出せるようになっていたのである。

甲骨占卜において、占卜を行うものの意図に沿った結果が出せるようになっていたことは、狩猟や祭祀の可否など、人間が能動的に行う事柄の場合には、それを否定するものが少ないことを説明できる。つまり、あらかじめ肯定するひび割れを発生させるように甲骨を加工してから占卜を行っていたのである。

ところが、これだけでは、降雨や出産の日付のような、人為的に決定できないものにも正解が多いことは説明できない。実は、この点については、本稿で述べる改竄や附会によって説明できる。本稿は、甲骨文の改竄や附会の例を挙げ、さらに、甲骨占卜の改竄や附会が担っていた社会的役割を明らかにしたい。

一 改竄・附会の手法

甲骨文は占卜に関する記述であるため、文章が定型化しており、前辞（占卜状況の叙述）・命辞（占卜の内容）・繇辞（吉凶の判断）・驗辞（占卜の結果）・記時（月次や占卜地）で構成される。^②繇辞・驗辞・記時は省略されることが多いが、次はいずれも省略されていない例である。

丁丑卜賓貞、束得。王占曰、其得惟庚、其惟丙其齒。四日庚辰、束允得。十二月。

（丁丑（二）トして賓貞^ト、束は得るか。王占いみて曰く、其れ得るは惟^トれ庚ならん、其れ惟れ丙なれば其れ齒ならんと。四日庚辰（二）、束は允^{まこと}に得たり。十二月）

〔甲骨文合集〕^③（以下、合集とする）八八八四、第一期賓組、卷末図一）

「丁丑卜賓貞」の部分が前辞であり、丁丑の日に賓（人名）が占卜儀式を担当したことを記している。「束得」が命辞であり、束（人名）が何か（狩猟の獲物か戦争の捕虜であろう）を得るかどうかを占っている。「王占曰其得惟庚其惟丙其齒」が繇辞であり、殷王が占い、庚の日であれば得ることができ、丙の日であれば齒（占卜用語。凶の意か）であると判断している。「四日庚辰束允得」が驗辞であり、王の占い通りに、庚辰の日に成果があったことを記している。甲骨文で日数を数える際には一般に当日を含むので、ここで言う「四日」は、日本語の「四日目」に相当する。末尾の「十二月」は月次を記した記時である。

この記述の中で、王が庚の日に得ると占い、実際に庚の日に得られたという部分が問題となる。先に述べたように、甲骨占卜はひび割れの形から将来を占うものであり、科学的根拠はないと言ってよい。それにも関わらず、「得」の日付を正確に言い当てている。

甲骨文は、占卜を行った直後に命辞や繇辞を記し、結果が判明してから驗辞を記すという方法で刻まれたのではない。卷末図一のように、命辞・繇辞・驗辞が一連の文章になっており、字体も一貫性があることから、占いの結果が全て判明してから命辞・繇辞・驗辞をまとめて刻んでいたことが明らかになっている。

つまり、結果を知ってから命辞や繇辞を書き換えたり（改竄）、都合のよいように解釈したり（附会）することができたのである。この辞例であれば、実際に庚辰の日に得られたことを確認した後で、繇辞を書き換えたのである。さらに穿った見方をすれば、初めは「其惟丙其齒」と丙の日に得られないことだけを占っておけば、一〇分の九の確率で当たるとその上で、結果を見てさらに具体的な「其得惟庚」を付け加えたのかもしれない。

本稿は、この例のように、改竄や附会によって、予測が困難な内容を

あたかも甲骨占卜によって正解を言い当てたかのように装った甲骨文について考察する。

二 改竄

甲骨文の繇辞には、日付まで明示したものがあがるが、いずれも降雨・出産・戦闘の発生など、予測が困難なものであり、結果が判明してからの改竄と判断できる。

次の例は出産に関する占卜であり、出産の日付と性別を占いによって当てたという内容である。

辛未卜般貞、婦媯媯、嘉。王占曰、其惟庚媯、嘉。三月庚戌媯、嘉。
 (辛未(88)トして般貞う、婦媯(人名)媯するに、嘉なるか。王占いみて曰く、其れ惟れ庚に媯せば、嘉ならんと。三月庚戌(45)媯し、嘉たり)
 (合集四五四、第一期賓組、卷末図2。「媯」は出産、「嘉」は男児誕生の意。)

この占卜の繇辞では、辛未の日に出産の日付を庚の日、新生児の性別を男児と予測し、驗辞において三十九日後の庚戌の日にそれが的中したことが記されている。しかし、一ヶ月以上も先の出産日を正確に予測することは現代でも困難であり、しかも性別まで言い当てているのであるから、これは結果を知ってから繇辞の内容を書き換えたことが明らかである。

次の二片の例も出産を占ったものであり、婦好(人名)についての占卜である。第一片で占った出産日(甲寅)と性別(女)が、第二片の驗辞において的中していたことが記されている。これも結果が判明してから繇辞を改竄した例である。

壬寅卜般貞、婦媯媯、嘉。王占曰、其惟媯申媯、吉、嘉。其惟甲寅媯、不吉、翌、惟女。

(壬寅(88)トして般貞う、婦媯媯するに、嘉なるか。王占いみて曰く、其れ惟れ媯申(45)であろう)に媯せば、吉、嘉ならん。其れ惟れ甲寅(51)に媯せば、不吉、翌ならん、惟れ女ならんと)

(合集一四〇〇一、第一期賓組。「翌」は凶の意。□は甲骨片の欠損による判読不能の文字。)

甲申卜般貞、婦好媯、嘉。王占曰、其惟丁媯、嘉。其惟庚媯、弘吉。三句又一日甲寅媯、允不嘉、惟女。

(甲申(52)トして般貞う、婦好媯するに、嘉なるか。王占いみて曰く、其れ惟れ丁に媯せば、嘉ならん。其れ惟れ庚に媯せば、弘吉と。三句又一日甲寅(51)媯し、允に嘉ならず、惟れ女なり)

(合集一四〇〇二、第一期賓組)

甲寅だけではなく、戊申・丁・庚という三種の日付についても吉凶が占われているので、前掲の例よりは当たる確率が高いように思われるが、出産の日付を十干のうち甲・丁・戊・庚という四日に限定できていることが、そもそも不自然なのであり、結果を知ってから改竄であることは疑いない。

次は、天候について予測した例である。

戊子卜般貞、帝及四月令雨。

貞、帝弗其及今四月令雨。

王占曰、丁雨、不惟辛。旬丁酉、允雨。

(戊子(59)トして般貞う、帝四月に雨に令するに及ぶか。

貞う、帝其れ今四月に雨に令するに及ばざるか。

王占いみて曰く、丁に雨ふらん、惟れ辛にあらざらんと。旬丁酉(34)、允に雨ふれり)

(合集一四一三八、第一期賓組。帝は神名。旬は十日目を意味する)

九日後の天候を予測することは、気象衛星やスーパーコンピュータを

駆使する現代でも困難なのであるから、この片も繇辞の改竄であることが明らかである。

次も同様に、天候を正確に言い当てたとする例である。

丁卯卜、雨不至于夕。

丁卯卜、雨其至于夕。子占曰、其至、亡翌戊。用。

己巳卜、雨不延。

己巳卜、雨其延己。子占曰、其延、終日。用。

己巳卜在妣、庚不雨。子占曰、其雨亡司。夕雨。用。

己巳卜在妣、其雨。子占曰、今夕其雨、諾。己雨。其翌日庚亡司。用。

(丁卯(04)卜す、雨は夕に至らざるか。

丁卯卜す、雨は其れ夕に至るか。子占いみて曰く、其れ至るは、翌戊(戊辰(05))には亡し。用いらる。

己巳(06)卜す、雨は延べざるか。

己巳卜す、雨は其れ己に延べるか。子占いみて曰く、其れ延べん、終日ならん。用いらる。

己巳卜し妣に在り、庚(庚午(07))か)雨ふらざるか。子占いみて曰く、

其れ雨は亡司ならん、夕に雨ふらん。用いらる。

己巳卜し妣に在り、其れ雨ふるか。子占いみて曰く、今夕其れ雨ふらん、

諾ならん。己(己巳か)に雨ふらん。其れ翌日庚(庚午か)は亡司ならん。用いらる。

(殷墟花園莊東地甲骨^④(以下、花東とする)一〇三。花東甲骨は非王卜辞の子組に属し、占卜者は「子」。「用」は繇辞の通りになったことを表す。

「延」は延長の意、亡司は降雨の状態を示す。「在妣」は占卜地を記す)

いずれの繇辞にもその通りになったことを表す「用」が附されている

が、実際に時間帯まで含めて完璧に降雨を予測することは不可能であり、これも結果を知った上で繇辞を改竄したものである。

次の占卜では、来媪(外敵の来襲)の日付を当てている。

甲午卜亘貞、翌乙未易日。王占曰、有祟。丙其有来媪。三日丙申、

允有来媪、自東。妻告曰、兕……

(甲午(02)卜して亘貞う、翌乙未(03)、易日なるか。王占いみて曰く、

祟り有らん。丙に其れ来媪有らんと。三日丙申(03)、允に来媪有り、東

よりす。妻(人名)告げて曰く、兕……(以下欠損)……)

(合集一〇七五、第一期賓組、卷末図3。「易日」は曇天の意)

外敵の来襲は予測できるものではないから、これも結果が判明した後

の改竄である。命辞が天候(易日)に関する記述であるのに対し、繇

辞が来媪について述べていることも不自然であり、ここからも繇辞が後

から付加されたことが窺われる。^⑤

次は人物の来訪についての占卜である。

甲辰卜亘貞、今三月、光呼来。王占曰、其呼来、迄至惟乙。旬又二

日乙卯、允有来。自光以羌芻五十。

(甲辰(04)卜して亘貞う、今三月、光(人名)呼びて来たるか。王占い

みて曰く、其れ呼びて来たらん、迄至するは惟れ乙ならんと。旬又二日

乙卯(05)、允に来たる有り。光より羌の芻せる五十を以てす)

(合集九四、第一期賓組。迄至は到来の意、羌は種族名、芻は捕獲の意)

十一日後の来訪を占卜によつて予言したというものであり、改竄であ

る可能性が高い。ただし、殷王に従う人物であれば、あらかじめ来訪の

日付を定めておくことも可能であり、来訪日の情報を隠匿して占卜した

可能性もある。

次は「執」の日付を言い当てたというものであるが、驗辞は過去の日

付である。

癸巳卜賓貞、臣執。王占曰、吉。其執惟乙丁。七日丁亥、既執。

(癸巳(08)卜して賓貞う、臣執るか。王占いみて曰く、吉、其れ執るは

惟れ乙・丁ならんと。七日丁亥(24)、既に執れり)

(合集六四三、第一期賓組。執は捕獲の意)

繇辞では「執」は乙日か丁日であるとし、実際に占卜日から数えて七日前に既に「執」していたという内容である。これも改竄であろうが、何らかの方法で「執」があったことを知りながら、それを隠して占卜したとも考えられる。

次はやや特殊な例であり、命辞はないが、験辞で命辞の内容が現出したことが記されており、命辞を改竄したものと考えられる。

貞、自今五日、雨。五、乙巳允雨。

(貞う、今より五日、雨ふるか。五、乙巳允に雨ふれり)

(合集一二九六三、第一期賓組、卷末図4。験辞の「五」は「五日」の省

略か脱字)

命辞で五日目の降雨を占い、験辞でその通りになったとしているが、偶然に命辞通りに五日目に雨が降ったとするよりは、結果を知った上で、命辞を改竄したとするのが妥当である。

三 附会

前節では、占卜の内容を改竄した例を挙げたが、本節では、正解しなかった占卜を、都合のよいように解釈して正解であったとしたり、正解しなかったことを曖昧にしたもの(附会)について述べる。

次に挙げるものは附会の辞例である。正反両方を述べる形式の対貞であり、繇辞のみが亀甲の反面に記載され、また験辞は命辞の一方に付されているため、順序が煩雑である。カッコ内の書き下しは命辞(A・C)、繇辞(D)、験辞(B)の順に直してある。

貞、翌庚申、我伐、易日。(A) 庚申、明霧。王来、途首、雨。(B)

貞、翌庚申、不其易日。(C)

占曰、易日、其明雨、不其夕□。(D)

(A 貞う、翌庚申、我れ伐するに、易日なるか。C 貞う、翌庚申、其れ易日ならざるか。D 占いみて曰く、易日なるも、其れ明は雨、其れ夕に□せずと。B 庚申、明は霧なり。王来たる途首に雨ふれり)

(合集六〇三七、第一期賓組。伐は祭祀名(伐祭)。途首は道中の意。明は明け方の意)

翌日の天候について、「易日(曇天)であるが、明け方は雨であり、夜間は□ではない」と占ったが、実際には明け方は霧であったため、占いははずれである。しかし、王が祭祀場に来る途中で雨が降ってきたため、験辞に「王来途首雨」と記し、全くのはずれではないと述べることで、占いのはずれを糊塗している。

殷代における日付の変更点の特徴を利用した附会の例もある。殷代には、日没を日付の変更点としていた。そのため、例えば甲子(01)の日に「今夕」と言った場合、左図の※印に当たるが、この時間は日付で言えば乙丑(02)になる。つまり、「甲子の夜間」とも「乙丑」とも解釈できるのである。

甲子 (01)	乙丑 (02)	丙寅 (03)
———	———	———
昼間	夜間※	夜間
	……	……
	昼間	昼間

次の附会辞例は、日付の変更点を利用したものである。

己巳卜賓貞、龜得妊。王占曰、得庚午夕聖。辛未、允得。

(己巳(06)トして賓貞う、龜は妊に得るか。王占いみて曰く、得るは庚午(07)の夕聖ならんと。辛未(08)、允に得たり)

(合集九二六、第一期賓組、卷末図5。「妊」は地名か。夕聖は夜間を表す) 繇辞では庚午(08)の夜間に「得」すると占っているが、実際には辛

未(8)の日に「得」があったので、占いははずれである。しかし、庚午(9)の夜間(左図※印)は日付で言えば辛未(8)なので、占いははずれたのではないという附会的な判断を記したのである。

己巳(9)	庚午(9)	辛未(8)
———	———	———
昼間	夜間	夜間※
	……	……
	昼間	夜間(実際の得)

次も同様の例である

丁未ト王貞、今夕雨。吉。告之夕。允雨、至戊申雨。

(丁未(15)トして王貞う、今夕雨ふるか。吉と。之を告ぐるは夕たり。

允に雨ふり、戊申(15)に至り雨ふる)

(合集二四七七三、第二期出組)

丁未(15)に、その夜に雨が降るかを占い、「吉」と判断したが、実際には翌日の戊申(15)に降った。そこで、「占いの判断を告げたのは夜であった」ので、日付が変わっており「今夕」は戊申(15)を指す」とし、附会的な解釈で占いが正解したことになっている。

次の例には験辞はないが、繇辞に吉凶両方が記されていることから、一種の附会であると判断できる。

庚寅ト賓貞、今者、王其歩伐人。

庚寅ト賓貞、今者、王勿歩伐人。

王占曰、吉。惟有呼己其伐。其弗伐不吉。

(庚寅トして賓貞う、今者、王其れ歩き人を伐せんか。

庚寅トして賓貞う、今者、王歩き人を伐する勿からんか。

王占いみて曰く、吉と。惟れ己其を呼びて伐する有らん。其れ伐せざれば不吉と)

(合集六四六一、第一期賓組。繇辞は反面に記載。「伐」は、この場合は攻撃を意味する。「人」は殷に敵対する勢力であり、「人方」とも呼ばれる。「己

其」は人名)

この繇辞で問題になるのは「其弗伐不吉」の部分である。「吉惟有呼己其伐」の判断によって戦争は行われたであろうから、この部分については正解か否かは判断できる。しかし、戦争は行われなかったため、「其弗伐不吉」は誰にも検証ができない。つまり、勝てる見込みがある戦争であれば、前半部分は正解となり、後半部分は検証できないのではずれにはならないのである。

次の例も同様に、吉凶の両方が述べられている。

王占曰：(欠損)：不吉。惟祀吉。

(王占いみて曰く……不吉。惟れ祀れば吉なり)

(合集二二六反面、第一期賓組)

この場合も、「惟祀吉」により祭祀が行われたのであろうが、祀らなかつた場合の「不吉」については、決して検証ができない。

四 改竄・附会の時代的変遷

第二・三節では、甲骨文の改竄・附会の辞例について挙げたが、なぜ、改竄や附会が行われたのだろうか。

甲骨占トでは王が吉凶判断を担当していることから、殷代には王に占い師としての能力が求められていたことは確実である。従って、改竄や附会によって、吉凶判断が正解したように装い、占い師としての能力を誇示したと考えられる。

この点については、おそらく異論はないであろう。しかし、本節で問題にするのは、改竄・附会が行われた期間である。実は、改竄や附会は、甲骨文の製作時代である殷代後期に一貫して行われたのではない。

甲骨文に見える改竄・附会またはそれが疑われる辞数を時期別に統計

表1 改竄・附会、およびその疑いがある辞例数（合集・花東所載分）
（分類は楊郁彦による）

	改竄・附会辞数	総片数
第一期	187	20095
花東	7	561
一二間期	0	2879
第二期	4	4346
第三期	0	5230
第五期	0	4111
合計	198	37222

甲骨占下の改竄・附会

近年の字体研究により、甲骨文は二派が併行して作製していたことが明らかになった。それぞれ、殷墟遺跡がある小屯村の北部と南部から出土していることから村北派・村南派と呼ばれる。陳夢家『殷虚卜辞綜述』^⑫が発見した「某組」と呼ばれる甲骨文のグループのうち、賓組・出組・何組・黄組が村北派であり、自組・歴組・無名組が村南派である。花園莊東地甲骨は非王卜辞の子組に属するが、子組は字体が賓組に近く、また占卜

したのが表1である。表1は、合集と花東を元に筆者が集計し、分類は楊郁彦『甲骨文合集分組分類総表』^⑦に拠っている（表2・3も同じ）。楊郁彦が二種の組の中間的な字体に分類したものは加算していない。甲骨文はその製作年代によって五期に区分される。近出の花園莊東地甲骨は、出現する人名が第一期と共通するので、第一期の製作とされている。また、歴組と呼ばれるグループは、古くは「第四期」とされているが、近年における甲骨文の字体研究により、第一期と第二期の間にはいることが明らかにされた。これとは別に、筆者も歴組の先王称谓に關して検討した結果、やはり歴組は第一期と第二期の間であるという結論が得られた。そこで、便宜上、歴組を一二間期と呼ぶことにする。表1に明らかのように、改竄や附会は第一期に集中して行われ、一九八例のうち、一九四例が第一期である（花東甲骨も第一期）。一二間期以降にほとんど行われなくなったのはなぜだろうか。この問題については、村北派と村南派を別個に分析する。

表2 村北派・村南派別の改竄・附会辞例数（合集・花東所載分）
（分類は楊郁彦による。花東子組以外の非王卜辞や組間字体は省く）

時代	村北派	改竄附会数	総片数	村南派	改竄附会数	総片数
第一期	賓組	186	18276	自組	1	1819
	花東	7	561	—	—	—
一二間期	—	—	—	歴組	0	2879
第二期	出組	4	4346	—	—	—
第三期	何組	0	1954	無名組	0	3276
第五期	黄組	0	4111	—	—	—
	合計	197	29610	合計	1	7974

様式も賓組に類似するので村北派と見なす。

表2は、村北派・村南派別の改竄・附会辞例の統計である。合集・花東所載分を対象として筆者が集計した。

一見して分かるように、村南派には改竄・附会やそれが疑われる例がほとんどなく、次の例が唯一である。しかも、この片は方述鑫『殷虚卜辞断代研究』^⑬による分類では自組B1にあたり、これは李学勤・彭裕商

『殷墟甲骨分期研究』の分類では自組小字一類にあたるが、このグループは、自組の中でも占卜様式が賓組に近いので、賓組の影響があったと思われる。^⑭

丁酉卜、今日雨。余曰、戊雨。昃允雨自西。

（丁酉（𠄎）卜す、今日雨ふるか。余曰く、戊（戊戌（𠄎）か）に雨ふらんと。昃に允に雨ふり、西よりす）

（合集二〇九六五 第一期 自組。昃は時刻を表す語。降雨の日付を言い当てており、改竄の疑いがある）

要するに、村南派は改竄や附会を行わなかったと判断してよいのである。なお、村南派は、繇辞を詳細に記すとすらほとんどない。表3は、繇辞を詳細に記した辞例数である。「吉」や「不吉」のみ、あるいは単に命辞を肯定または否定したものは、詳細な繇辞

組には盛んに行われたが、甲骨占卜そのものの意義の変化により、それ以降は減少したことも明らかにした。

『禮記』表記篇に、「殷人は神を尊ぶ。民を率い以て神に事え、鬼を先にして礼を後にす」とある。この記述が現在に至るまで、研究者の間で漠然とした共通認識になっており、殷は呪術的な支配を行った王朝であるという印象が共有されてきた。甲骨占卜は殷末の第五期まで盛んに行われていたのであるから、周王朝と比較すれば「先鬼而後礼」という記述も誤りではない。しかし、殷代後期の約二世紀の間にも思想上の変化があり、甲骨占卜が将来を判断するという純粹な占卜としての目的から儀礼的行為に変質し、そのため改竄や附会が行われなくなったのである。王朝間の変化を分析することも重要であるが、王朝期間内の変化も見逃してはならない。

注

- ① 落合淳思「殷代占卜工程の復元」『立命館文学』五九四号、二〇〇六年。
- ② 他に、甲骨の納入を記した「記事刻辞」や、ひび割れが出現した時の状況を記した「兆辞」があるが、これらは卜辞から独立して記述される。
- ③ 郭沫若主編『甲骨文合集』中華書局、一九八三年。
- ④ 中国社会科学院考古研究所『殷墟花園莊東地甲骨』二〇〇三年。
- ⑤ この記述は、命辞と繇辞・驗辞の文字の大きさが不斉一であり、刻字自体が別に行われた可能性もある。
- ⑥ こうした改竄や附会が殷王の指示によって行われたのか、あるいは貞人や刻辞者の判断によって行われたのかは、甲骨文からは明らかにできない。

⑦ 楊郁彦『甲骨文合集分組分類総表』芸文印書館、二〇〇五年。

⑧ 魏慈徳『殷墟花園莊東地甲骨卜辞研究』台湾古籍出版、二〇〇六年、第二章第二・三節。

⑨ 林澧「小屯南地発掘與殷墟甲骨断代」『古文字研究』九、一九八四年。黄天樹『殷墟王卜辞的分类与断代』天津出版社、一九九一年。李学勤・彭裕商『殷墟甲骨分期研究』上海古籍出版社、一九九六年。

⑩ 落合淳思「甲骨祭祀と歴史の断代」『史林』八三・四、二〇〇〇年。同『殷王世系研究』立命館東洋史学会、二〇〇二年、第二章。

⑪ 注⑨参照。

⑫ 陳夢家『殷虚卜辞綜述』科学出版社、一九五六年。

⑬ 李学勤・彭裕商前掲書、三一―九頁。

⑭ 方述鑫『殷虚卜辞断代研究』天津出版社、一九九一年。

⑮ 李学勤・彭裕商前掲書、七一頁。

⑯ 自組内の区分については、拙稿「甲骨文自組の分群と甲骨文区分の全体像」(未刊)で述べる。

⑰ 姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞類纂』中華書局、一九八九年。

⑱ 黄組に受年が十一例見えるが、片数で言えば四片であり、東西南北の各方面について別個に占卜したものが二片あるため、辞例数がやや多くなっている。

⑲ 第一期賓組は数量が多く、占卜内容のバリエーションが豊富であり、また文字が大きく鮮明であるため、印象に強く残りやすいという特徴がある。一方、それ以外の甲骨群は、数量が少なく、定型化しており、また文字が小さいため、印象として残りにくい。そのため、殷代に対する認識は第一期賓組により形成されることが多く、殷代後期における時代の変遷に関する研究が少ないことの一因になっている。

(本学非常勤講師)

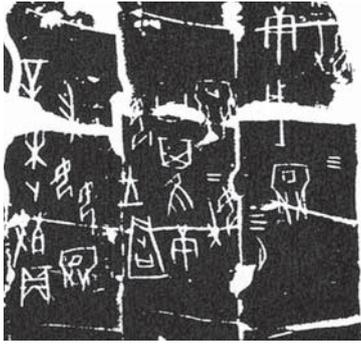
卷末図（1・3は三分の二に縮小。他は等倍）

1 合集八八八四 右行



允得十二月
四日庚辰東
其惟丙其齒
日其得惟庚
得王占
賓貞束
丁丑卜

2 合集四五四 右行



嘉 庚
婉 戊
三月 婉
嘉 日其惟庚
嘉王占 婦妣婉
辛未卜 般貞

3 合集一〇七五 左行 「不悟颺」は兆辭



甲午卜亘貞翌乙未易日
王占曰有崇丙其有來
媯三日丙申允有來媯
不悟颺 不悟颺 自東妻告
日兕（以下欠損）

4 合集一二九六三 左行



貞自今五
日雨五乙
巳允雨



5 合集九二六 左行 下部の「辰」「五」は別辞

未	夕	得	王	龜	己
允	墜	庚	占	得	巳
得	辛	午	曰	妊	卜
		五	辰		賓
					貞